調　査

第2回伊東市観光ヒアリング調査報告[1]

石橋太郎・野方　宏・大脇史恵・朴　根好

はじめに

静岡大学人文学部経済学科の教員を中心とした観光研究プロジェクト・チームは、2008年1月31日に静岡県伊東市役所観光課への第2回目のヒアリング調査を実施した[2]。今回は、伊東市の最近の観光動向、外国人観光客の誘致活動と受け入れ状況、広域観光および独自の取り組みについて調査することを目的とした。

伊東市役所観光課におけるヒアリング[3]

日　時　2008年1月31日

対応者　伊東市観光課課長補佐　堀井祐三氏

1．伊東市の最近の観光動向

末尾に掲載した資料1A、1Bにみられるように、伊東市の観光客数[4]は1991年度をピーク（約896万人）に減少に転じ、その傾向は現在（2006年度）まで続いている。具体的な数字で示せば、観光客数はピーク時に比べほぼ24%減少し、2004年度からは700万人台を割り込むまで低下した（2006年度は682万人）。

「平成18年度伊東温泉観光客実態調査報告書」により観光客の居住地をみると、観光客の約8割は首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉）からであり、これは伊豆地域の平均を10ポイントほど上回る数字であり、伊東の観光地としての立地特に交通の便の良さを反映した数字と考えてよい。

1　今回のヒアリング調査を含めた2007年度の観光研究プロジェクトに対し、静岡大学人文学部および静岡大学人文学部経済学科から研究助成を受けた。

2　前回のヒアリング調査は2005年12月16日に実施され、石橋太郎・野方宏「伊東市観光ヒアリング調査報告」として静岡大学『経済研究』11巻1号（2006年7月）に掲載されている。なお、今回のヒアリング調査に参加したのは、野方宏、朴根好の2名である。

3　今回のヒアリング調査に協力していただいた、伊東市観光課課長補佐堀井祐三氏にお礼申し上げる。

4　なお、資料1にある来遊客数とは宿泊客と日帰り客の合計であり、入込み客数とか観光交流客数などと呼ばれるものと同一である。

このことは、伊東までの交通手段の55.2%が鉄道を利用しているという数字からも窺えるであろう。因に、静岡県からの観光客は9.3%であり、全体の１割にも満たなかった。また、前年度に比べ、甲信越・北陸地方や近畿地方からの増加が見られた。

滞在期間では、1泊2日の旅行の比率が依然高く全体の6割を越えているが、他方で3泊4日、4泊5日以上などの滞在期間の長い旅行日程の比率が増加していることも近年の特徴として指摘できる。

年齢別には資料2に示されているように、年代に関わりなく幅広い年齢層から誘客できているが、年代別に見ると、30代が24%、20代が21%と各々1位と2位を占めた。さらに、10代の旅行者の増加も目立ち、前年比では33%増ともっとも高い伸びを示した。なお、2006年度は前年度と比べ、10代から40代までの観光客は増加しているが、50代以降の観光客は減少するという対照的な動きを示している。

宿泊施設別にみると、「旅館・ホテル」が69%と高い比率を占めているが、伸び率で見ると「ペンション」が141%増と最も高い数字を示した。この数字は、伊豆高原地区を中心としたペンション形態の宿泊施設の展開が、近年の「団体旅行から少人数・家族旅行へ」といった観光客のニーズの変化と関連して、今後の伊東観光を考える上での1つのポイントとなる可能性を示しているのかもしれない。

伊東温泉に来た動機では、「温泉が豊富」が最も多かったが、伸び率で見るとテレビの宣伝（＋51%）、史跡文化碑めぐり（＋43%）、マリンスポーツ（＋34%）などが目立った。伊豆高原地区やマリンスポーツなど、テレビの旅番組に取り上げられるケースも多く、そうしたことが若年層の増加という誘客効果をもたらしたと考えられる。また、伊東を訪れた回数が4回以上の観光客が約50%もおり、こうしたリピーターの多さは立地や観光客の年齢層などと並んで伊東の観光特性を考える上で重要である。

2. 外国人観光客

先に見たように、伊東市の観光客数は1991年度をピークに減少に転じ現在に至っているのに対し、資料3にみられるように、外国人観光客数は増加傾向にある。例えば、2001年（暦年）の外国人観光客は4259人だった、2006年（暦年）にはその4倍を上回る17216人にまで増加している。外国人観光客の大部分は台湾・中国・韓国などの東アジアからである（2006年では95%）が、国別観光客の割合などの点から見るといくつかの特徴が見られる。まず、中国からの観光客は数・割合とも高い伸びを示している。2001年と2006年を比較すると、数の上では11倍（159人→1798人）、割合では約3倍（3.7%→10.4%）と著しい伸びを記録している。特に、2005年からの2年間をみると、数・割合とも極めて高い伸びが見られる。訪日中国人観光客は近年急速な増加傾向にあるが、その波が伊東にも押し寄せていると考えられる。

他方、韓国からの観光客は中国のそれと比べると逆の傾向が見られる。2006年は、数の上では、2004年のピークの6割弱（242人）、割合では2003年のピークの1/4以下（1.4%）となっている。2006年の国別訪日外国人旅行者数をみると、韓国人観光客は212万人（全体の29%）、8年連続で首位となっており、また対前年伸び率も21%と極めて高い数字を示している[5]。このような伊東における韓国人観光客の動向を示す数字の原因は、ヒアリング調査時点では不明であり今後の課題としたいが、次に述べる台湾人観光客の動向からヒントが得られるのではないかと考えている。

資料3の特徴的な点は、台湾からの観光客が圧倒的に多いことである。外国人観光客に占める台湾からの観光客の割合をみると、8割を大きく上回る年が大半であり、国別訪日外国人旅行者数では2割に満たない台湾人観光客の現状と対比すると、8割という数字は「異常なほど」高い。この「数字の異常さ」については前回のヒアリング報告を参照していただきたい[6]。

行政レベルでの外国人観光客に対する取り組みとしては、2009年3月に予定されている富士山静岡空港の開港に伴い、外国人観光客の誘致活動と受け入れ態勢を構築すること、そのための予算措置も講じられていることが紹介された。こうした取り組みの具体例の一つが、官民一体の組織である「伊豆東海岸国際観光モデル地区整備促進協議会」を中心にした誘客活動である。資料4にみられるように、その活動は多岐にわたっている。従来から行っていた外国人向けパンフレットの作成、外国人向け案内所の設置や外国語案内板の設置などの観光サービスに加えて、外国語通訳ボランティアの育成・支援、行政を中心にした観光ミッションなどの対外観光プロモーション活動など、従来に比べ活動の幅が大きく広がって来ている。

また、富士山静岡空港開港と伊東観光を結びつける上では、行政がリード役として事業を興すという役割が必要ではないか、との考えが述べられた。例えば、韓国の観光客を中心に男性には伊東でのゴルフ、女性向けには「お座敷文化大学」を1つの目玉にした観光プロモーションなどが挙げられた。

もっとも、富士山静岡空港開港と観光を結びつける上での大きな問題として、空港から伊東までのアクセスつまり第2次交通をどうするか、ということも当然ながら意識されていた。

3. 広域観光

前回同様、熱海・伊東・下田という伊豆東海岸3市2町としての観光という市町村を越えた広域連携の取り組みが紹介された。その中で、「鉄道」をキーワードにした観光の可能性が興味深く感じられた。JR伊東線・伊豆急行線という「観光路線」の利用促進を推進することにより、伊豆東

---

[5] 国土交通省編『平成19年度観光白書』2007年、44頁。

[6] 石橋太郎・野方宏「伊東市観光ヒアリング調査報告」静岡大学『経済研究』11巻1号（2006年7月）56頁。

海岸地域の活性化や観光振興を図るといった広域観光の取り組みである。JR伊東線および伊豆急行線の各駅周辺の観光名所を紹介するために、「鉄道を利用した伊豆の旅リーフレット作成事業」が既に行なわれている。

また、富士・箱根・伊豆国立公園を背景とした神奈川県や山梨県との連携を強化し、「広域観光モデルルート」をテーマに官民一体の組織である富士箱根伊豆国際観光テーマ地区推進協議会」を中心にした誘客活動が紹介された。山梨、神奈川、静岡県の行政機関、民間事業者が連帯して、富士箱根伊豆地域およびその周辺地域における国際観光の一体的な振興を図り、外国人観光客の誘致を進めるという取り組みである。

4. 独自の取り組み

観光振興のための独自の取り組みないし活動として、「新しい観光資源の観光への結びづけ」が紹介された。これは、これまで行政が観光面で力を入れてきたものが、必ずしも観光客のニーズにマッチしていなかったのではないかという認識の下に取り組みが開始されたものである。その中でも、「史跡と文学散歩」をキーワードにした「いで湯の故郷の故の観光資源の活用」が興味深い。伊東温泉には昔から文人や芸術家たちが数々の名作や逸話を生んだ土地であり、数多くの文学碑・歌碑が溢れている。しかし、これまではこうしたものが観光資源として意識されることはほとんどなかった。そこで、一連の文学碑・歌碑を新たな観光資源として位置づけ、温泉を始めとしたこれまでの観光資源と結びつけて活用しようというアイデアが提案された。そのためのインフラ作りの一環として、自然・歴史・文学ガイドの養成を目的とした講習会の開催、文学関連の小冊子の作成などが実行されており、史跡・文化碑めぐりの観光客が増えつつあるとのことである。

また、市内を4地区に分け、エリア・ブランディングと呼ばれる新規事業も始まっている。これは、市内4地区のそれぞれを特徴づけ伊東の魅力を相乗的に高めようとする試みである。市内中心部は温泉、川奈・小室地区は花、宇佐美地区はみかんとウォーキング、八幡野地区はダイビングと博物館といったブランディングを行うのである。

もっとも、新しい試みがすべてうまくいっているわけではない。例えば、2006年度に始まった社会実験（道の駅伊東マリンタウンと市街地をバスで結び観光客を市中心部に誘導する）は所期の目的を果たせず、結局実験は2年間で打ち切られることになった。マリンタウンは年間200万人以上が集まる人気スポットであるが、市街地に観光客を引きつけるに十分な目玉（観光資源）のなかったことが原因とのことである。

5. おわりに

伊東市では観光関連が市内の産業の7割以上を占めている。従って、観光は伊東市にとって「生

命線」ともいえる存在である。伊東に限らず伊豆は観光に依存した経済の成り立ちをしているし、そうした伊豆を作り出した背景には、景観・立地・温泉・交通アクセスなどどの面をとっても他地域よりも恵まれている、という「環境」がある。しかし、この環境は時にはマイナスの方向にも作用する。つまり、あまりにも恵まれ過ぎているため、経済社会が大きく変化した時などには対応が遅れがちになってしまう。

ヒアリングの中で「市民に観光都市伊東のアピールをする」といった趣旨の発言があった。観光資源として何を積極的にアピールしていけばよいのか、その答えは、そこに住んでいる人が実は一番よく知っているのではないだろうか。

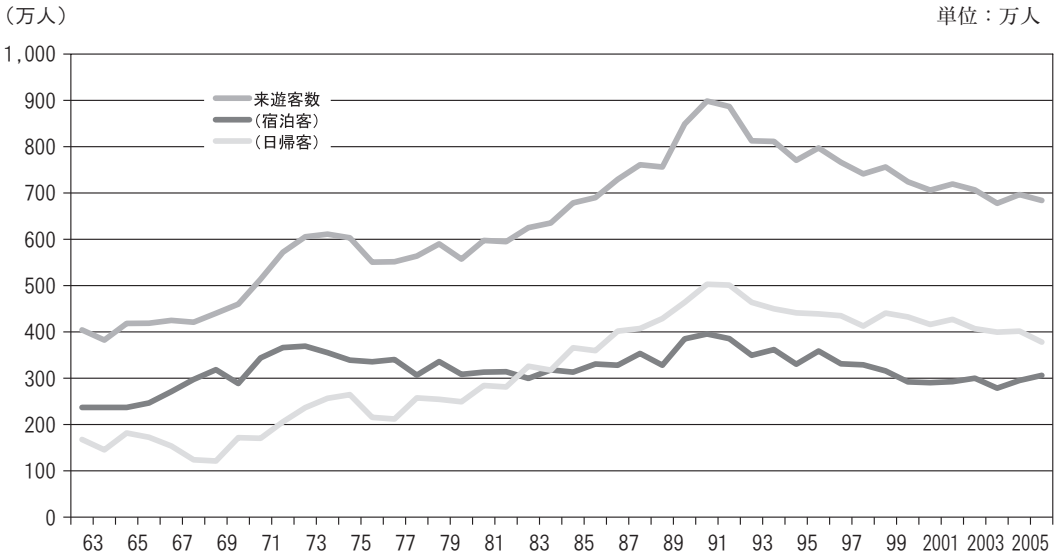
資料1A　年次別来遊客数推移

単位：千人

年次	来遊客数	（宿泊客）	（日帰客）	年次	来遊客数	（宿泊客）	（日帰客）
63	4,030	2,360	1,669	85	6,763	3,120	3,643
64	3,809	2,360	1,448	86	6,876	3,292	3,583
65	4,168	2,360	1,807	87	7,268	3,267	4,000
66	4,170	2,455	1,715	88	7,583	3,523	4,060
67	4,232	2,701	1,530	89	7,538	3,266	4,271
68	4,192	2,960	1,232	90	8,461	3,837	4,623
69	4,388	3,173	1,205	91	8,955	3,941	5,013
70	4,584	2,876	1,708	92	8,836	3,841	4,995
71	5,118	3,424	1,694	93	8,101	3,481	4,620
72	5,699	3,650	2,049	94	8,087	3,604	4,483
73	6,035	3,679	2,356	95	7,681	3,288	4,393
74	6,091	3,537	2,554	96	7,946	3,572	4,374
75	6,013	3,378	2,635	97	7,635	3,299	4,335
76	5,486	3,343	2,143	98	7,387	3,275	4,111
77	5,497	3,388	2,109	99	7,538	3,145	4,392
78	5,620	3,055	2,565	2000	7,219	2,911	4,307
79	5,879	3,346	2,533	2001	7,038	2,892	4,146
80	5,552	3,071	2,481	2002	7,170	2,912	4,257
81	5,953	3,120	2,833	2003	7,041	2,988	4,053
82	5,929	3,128	2,800	2004	6,752	2,772	3,979
83	6,229	2,983	3,246	2005	6,941	2,940	4,000
84	6,331	3,167	3,164	2006	6,817	3,049	3,768

（出所）伊東市『伊東市統計書』各年度版より作成。

資料1B　年次別来遊客数推移



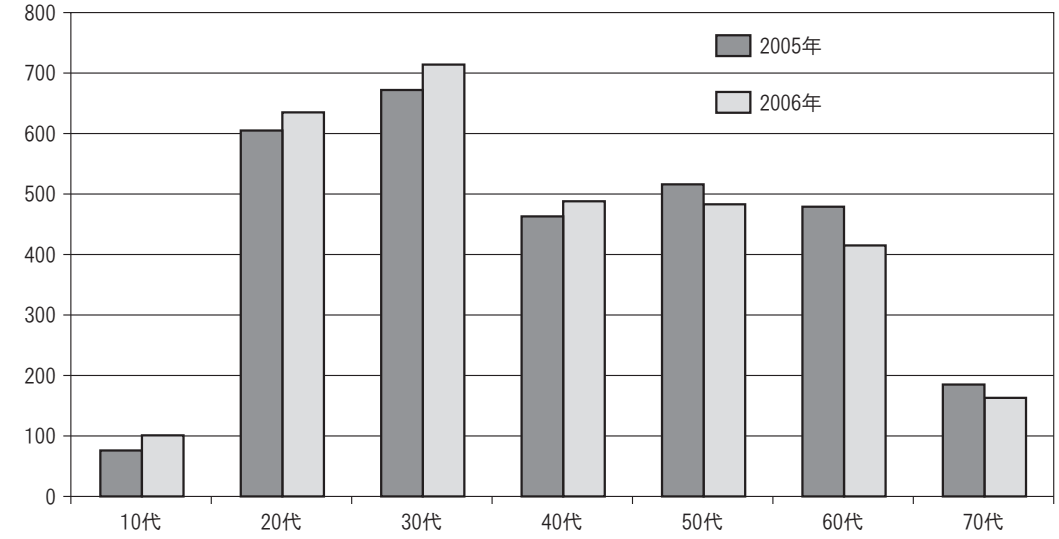
（出所）伊東市『伊東市統計書』各年度版より作成。

資料2　観光実態調査（年齢別）

単位：人

	2005年	2006年		2005年	2006年
10　代	76	101	50　代	516	483
20　代	605	635	60　代	479	415
30　代	676	714	70　代	185	163
40　代	463	488			

調査対象者数（30,000人）



（出所）伊東市観光課『平成18年度伊東温泉観光客実態調査報告書』

資料3　外国人宿泊客数

	韓国	台湾	中国	アメリカ	その他	計	回答軒数
2001	121	3,712	159	97	170	4,259	15軒
2002	261	4,794	254	325	586	6,220	30軒
2003	272	3,537	270	135	144	4,358	30軒
2004	414	9,443	285	184	145	10,471	34軒
2005	374	15,014	717	506	245	16,856	37軒
2006	242	14,466	1,798	350	360	17,216	38軒
国別比率（2006年）	1%	84%	10%	2%	2%	100%	

（出所）伊東温泉旅館ホテル協同組合

資料4　平成18年度　伊豆東海岸国際観光モデル地区整備推進協議会事業概要

事　業　名	事　　業　　内　　容
外客接遇実務研修	○「i」案内所における「i」追加サービス導入 JNTOの「i」サポートセンターの追加サービス（英語、韓国語、中国語による言語支援サービス）を利用した。 ○「i」案内所研修会への参加 日　時　平成18年12月14日～15日 場　所　虎ノ門パストラル、有楽町JNTO会議室 内　容　・外国人観光客への観光情報提供について ・テーマ別分科会、外国語講座、意見交換会 参加者　「i」案内所、観光案内所、観光協会等実務的に対応している職員6人 ○JNTO台湾訪日市場振興支援特別事業への参加 JNTO主催の台湾訪日市場振興支援特別事業へ参加し、インバウンドの重点市場の1つである台湾の訪日市場の現状等の情報収集を行った。
地区全体の資料作製	○既存伊豆東海岸パンフレット（英語／韓国語／中国語繁体字） 作製部数5,000部及び、伊豆東海岸まちあるきマップ（中国語繁体字）6,000部の増刷 ○新規伊豆東海岸パンフレット作製（A3カラー両面2つ折） ・英語、韓国語、中国語繁体字、簡体字版各10,000部）
善意通訳の会への助成	○善意通訳の会への助成金（基本活動費50,000円＋人数割） ・熱海グッドウィルガイドクラブ　64,500円 ・伊東市善意通訳の会　65,500円 ・IZU善意通訳の会　56,500円 ○善意通訳活動研修会の開催 日　時　平成19年3月17日　幹事　伊東市善意通訳の会 内　容　伊東タウンガイド研修、意見交換会 参加者　伊豆東海岸地区の各善意通訳の会会員19名

事　業　名	事　　業　　内　　容
観光案内板標識整備費	○伊豆東海岸地区にある既存の観光案内看板を英語・韓国語・中国語表記に改修を行った。
国際観光展参加費	○第14回台北国際旅行博への参加 日　時　平成18年11月3日～11月6日 参加者　3人（河津町、下田市、事務局） ○静岡県観光ミッション（広東省、香港）への参加 日　時　平成18年9月4日～7日 参加者　1名（事務局） ○静岡県観光交流団バンコク観光プロモーションへの参加 日　時　平成19年1月12日～17日　参加者1名（事務局） ○江蘇省、浙江省、上海エージェントメディア招聘ファムトリップ商談会への参加 日　時　平成18年10月17日　ホテルアソシア静岡 参加者　5名（3市2町各1名） ○香港旅行エージェントメディア商談会への参加 日　時　平成18年11月14日　ホテルアソシア静岡 参加者　1名 ○広東省旅行エージェント招聘ファムトリップ交流会への参加 日　時　平成18年11月28日　東急ハーヴェストクラブ伊東 参加者　2名（会長・事務局） ○上海市周辺地域インセンティブツアー旅行商品造成事業招聘ファムトリップ商談会への参加 日　時　平成18年12月12日　ホテルアソシア静岡 参加者　1名（事務局）